

# 住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1456号 1998年09月14日(月)

## 〈 McGwire and Clinton 〉

「私は新聞を必ずスポーツ面から見る。そこには人間が達成した偉大な記録がある。これに対して、新聞の他の面には人間が犯した愚行が記録されている」

正確な表現は忘れました。しかし、私がニューヨークに入ってからアメリカの出来事は、このルーズベルト大統領の言葉を想起させるに十分なものです。

「偉大なニュース」とは、マクガイアやソーサのホームランの本数であり、「人間が犯した愚行」とはスター特別検察官の報告書に盛られたクリントンのルウインスキーさんとの数々のスキャンダラスな記録であり、さらに言えば、こうした報告書がそのまま出てくると言う事実そのものです。

マクガイアの場合には、彼の記録があまりにも偉大であるが故にスポーツ面をはみ出して62号を打った翌日水曜日のアメリカの新聞の一面はほぼ彼に占拠された。一面ばかりでなく、例えばニューヨークの大衆新聞であるニューヨーク・ポストは、一面から五面までをマクガイア関連で埋めた。「スポーツ面」とは別にです。今はそれをソーサが追っている。

マクガイア騒動が一巡したら、アメリカの新聞の「スポーツ面」以外の面には、あたかも「人間の愚行」が戻ってきたように見える。事件そのものはとても付き合う気もしないくだらないものですが、とても劇場的な事件で世間の目を引きやすい。なにせ、スター特別検察官の報告書はセンセーショナルで面白い。しかし、どこかばからしさが漂う。

むろん筆者もこの報告書を全部読んでいるわけではない。なにせ445ページもある。しかし、ニューヨーク・タイムズの当該特集サイト (<http://www.nytimes.com/specials/starr/index.html>)のサーチ機能に思いつく単語を入れて検証してみればどんな内容を含む報告書が簡単に分かるし、CNNやその他メディアの報道によれば、この長い報告書にはクリントンとルウインスキーが事に及んだ10数回のケースが図式入りで詳細に掲載されているという。まさに「成人指定」というわけです。

文章だけではない。シカゴのタクシーの中で聞いたこの問題に関するラジオ番組(よって誰でも聞ける)では、耳を疑うような単語が数多く登場し、ニューヨーク・タイムズが

「an avalanche of salacious details of the President's affair with Monica S. Lewinsky」  
(salacious とは「みだらな」という意味です。avalanche とは「山のような」)

と表現するにふさわしい内容になっている。

で問題なのは、これが今後どのような展開を見せるかです。大統領の弾劾につながるのか、その場合にアメリカ経済、世界経済に与える影響はどうかという問題である。日本では、「クリントン問題を契機に、アメリカ経済がリセッションに陥る」というような見方もあるようだ。

今現在私がアメリカに出張中であるからと言って、特に大きな情報があるわけではない。伝えることが出来るのはアメリカ国内の雰囲気ですが、言えるのは、「みだらな」単語が飛び交う今回の事件に、アメリカ人が飽き飽きしているということだ。この問題を聞くとアメリカ人は面白いよりもうんざりした顔を見せる。従ってこの問題は多分、日本で考えられているほど尾を引きそうにはないように思う。急速に関心が低下する可能性が高いと思います。

ではどのような ending を迎えるのか。弾劾か、辞任か、それともサバイバルか。現時点のアメリカのメディアの中では、「弾劾すべきかどうか」でも、「下院が弾劾手続きに入るかどうか」でも、見方は割れていると言って良い。少なくとも、右左の意見を平等に掲載したがるマスコミを見る限りでは.... です。

しかし筆者はクリントンはサバイブするだろうし、今回の事件がアメリカ経済に与える影響は微笑だろうと思います。大体が、偽証とか大げさな罪状が挙げられているものの、事件そのものはホワイトハウスの執務室の中で、研修生との間で起きていなければくたらない、どこでもありそうな問題です。スター報告書で覗き見するには楽しいが、真剣に議論したら途中でばからしくなるような事件。アメリカ人もそれを知っているから、スター報告書が出たあとも「クリントンは良い仕事をしている」という意見が57%を占める(ABCテレビの調査)。他の世論調査でも、スター報告書を受けてクリントンの人気は落ちたという結果にはなっていない。

従ってマスコミは絶好の売り種としてこの問題を取り上げようとするでしょうが、国民は案外醒めていて、クリントンは辞任には至らないと考えます。

### 《 declining leadership 》

辞任しなくても、指導力が低下すると見る見方は正しいと思う。クリントンの顔を見る度に、スター報告書に盛られたようなことに及んでいるクリントンを思い浮かべれば、「指導力」を現在の大統領に感じるのは難しいかもしれない。

しかし筆者は、ことアメリカ経済に関する限りクリントンの incapability はそれほど問題ではないと考えます。大体が今のアメリカの好況は、政府が努力して生まれたものでは

ない。政府が手を放して規制を緩和したからこそ持続している。連邦準備制度理事会(FRB)の巧みな金融政策はあったかもしれませんが、クリントンだから今のアメリカの繁栄があるわけではない。個人や企業の努力の結果です。そしてその背景は、レーガンの規制緩和が作った面が強い。クリントンは果実を頂いているだけ。

一つ問題があるとすれば、アメリカの指導力を必要としている世界経済の運営面です。しかし、ここでも考えられている以上に、アメリカが出来ることは限られている。ロシアや日本の問題は、それぞれの国の問題であって主に政治問題だけに、アメリカが介入できる余地は少ない。介入すれば、もっと悪化する面もある。指導力が存在することを実感できる世界と、心配しなければならない世界は違うが、それによって直ちに大きな問題が生ずるわけではない。

しかし実際的な問題点がなくても、「アメリカの指導力」を巡る市場の「懸念」は一人歩きしかねない。これは、先週のニューヨーク株式市場の激しい動きを見ても分かる。筆者はたまたまダウが一時340ドル以上落ちた木曜日にニューヨーク証券取引所(NYSE)の中にいました。朝9時過ぎに取引所(NYSE)の中に入って、寄り付きから30分ほど。引けにも戻ってきたのですが、拍手で始まった寄り後の30分で、ダウは204ドルも下げた。メキシコのペソやブラジル不安、それにこのクリントン問題が背景。

その後も、ニューヨークの株は不安定な動きを続けており、こうした中で一貫して買われているのはアメリカの長期国債で、週末には一時利回りで5.14%を記録した。結局水曜日のダウの下げは249ドル強。一週間を振り返ってみても、レーバー・デー明けの火曜日が大幅上昇(約380ドルの上昇)だったものの、その後2日間は合計でそれを大幅に上回る下げ(約400ドル)を記録した。ただし、金曜日に150ドル以上値を上げて、週間としての上げ幅を確保したというのが情況。とにかく激しい。

市場は今週も激しい展開を示すでしょう。それが、日本や世界中の市場に伝搬するという訳です。ニューヨークの株価にはもともと高値警戒感があった。

週末のテレビを見ても、今後のニューヨークの株価の先行きに関しては「強気」「弱気」の見方が半々で、それぞれの陣営に付く人達が喧々囂々の議論をしている。

### 《 changing U.S. society 》

せっかくアメリカに来ていますから、この間に持った強い印象を書きましょう。たった数日間の印象ですが、久しぶりに出張してきた first impression が案外的を射ていることもある。

筆者が最初にアメリカに来たのは、1976年秋。今から22年も前です。それから80年末までニューヨークに駐在しましたが、当時のアメリカには「社会が悪い」「国が悪い」として怒りを露わにしながら生きていた人達が大勢いたと思う。その怒りは、街を歩く黒人やヒスパニックの連中の歩き方にもよく現れていて、彼らは体を揺らせ、眼光鋭く、周

困を威圧しながら歩いていた。夜の道で向こうから体の大きなこの手の連中が数人現れれば、こちらが男複数でも嫌な感じがしたものです。

街を歩いても、所在なしに死んだような、しかしどこか生温かい目で道行く人を見つめる連中もいました。それは「社会が悪いんだ、俺達はどうしようもないのだ……」と主張しているように見えた。明らかに社会には緊張感が漂っていたし、うかうかすると犯罪に巻き込まれる、という恐怖感がニューヨークには確かにあったのです。事実ニューヨークは危険な街で、運が悪い日本人は出張のその日にホテルの近くで HOID UP にあって所持金をすべて取られたといった話をよく聞いたものだ。幸い、小生はそうした経験は一度もないのですが。

しかし今回ニューヨークに来て強く感じたのは、かつて見られた

「生温かい反抗的な視線」

「誰かとぶつかってやろうという数多くの視線と、それらの視線の衝突」

が今のニューヨークには見られないのです。私が知っている限り、今のアメリカでは各人種や階層が一番衝突感なく生活を進めているように思える。街を歩いても、かつての緊張感はなく、なま温かい視線を感じることもない。つまり、ここで見る限り視線がぶつかりあうことのない社会にアメリカはなっているのです。

何がそうした変化をもたらしたのか。単純には答えられないでしょう。しかし一つだけ言えることは、90年代に入ってずっとアメリカは経済的には繁栄してきたし、その繁栄は自分で少し努力すれば、人種や階層の別なく享受できるという環境があったということです。「誰かが悪い」「社会が悪い」「システムがそうなっている」という当時強く見られた絶望感（一部の階層、一部の人種の連中の）が、今のアメリカにはない。絶望感がなければ、「やればできる」という楽観論が生まれますから、視線は他人には向かない。向くとしたら自分に向きます。自分に向いた視線は、他人のそれとはぶつからない。

アメリカ人を大きく変えたのは、レーガンの徹底した規制緩和策ではなかったかと思えます。既にこちらに来て何人もの方に会いましたが、為替の世界の大先輩である若林さん（現在はトラディションの中にオフィスを構えられている）は、

「ルーズベルト以降のアメリカは、社会主義の国だった。それをレーガンが変えた」

と言っていました。これはけだし名言だと思う。社会主義的規制は、やりたいことをさせない環境を作り、社会に閉塞感と既存権益を持つ人間達に対するそうでない人々の反感を生んだ。やりたいことが出来ず、それによって生じていると思われる不平等感が恒久化すれば、生まれるのは無力感と、その無力感を感覚的にさげすむ体内の気持ちを背景とした外に対する反抗心です。その反抗心がかつてのニューヨークには充満していた。それ

は反抗的な姿勢（歩き方）や生温かい視線となり、時に犯罪を生んでいたのではないかと。

今回来て思ったのは、「ニューヨークの連中の視線は、乾いてきている」というものでした。それはある意味で、ニューヨークという街からの面白みの喪失を意味する。ケネディ空港に降り立ったときから感じるあの緊張感がない。「ニューヨークはあの緊張感があるから好きだ」という連中はいっぱいいたし、私もそうでした。今のニューヨークには、「まじめで、品行方正な連中が充滿している」とも思う。つまり「自分を見つめて前を向いて歩く連中」が多いのです。つかかる連中がいない。だから、安全です。恐怖感を感じない街になった。

私などには、ちょっと物足りない。当時のニューヨークは、いつどこを歩くにも、

「ビルとビルの間から手が伸びてこないか」

「運転していてもわざとぶつけられて金をせびられるのではないか」

「止めている車の安否はどうか」

などなど心配しなければならぬことが沢山あった。その緊張感がまた、ニューヨークの特徴であり、楽しみでもあった。しかし、今はそれがない。土曜日の深夜にタイムズ・スクエアのかつては危険だった場所に行ってみました。しかし、そこには観光客などが列を作っていた。深夜1時になっても、この列は止まなかった。street artists 達が、演劇や演奏を披露する場所になっている。

ある意味で、今のニューヨークはひどくまじめな連中の集まりになったように思える。服装を見ても、歩き方を見てもそうです。はちゃめちゃなところがない。たった数日ですが、今のニューヨークで一番まともでない格好をし、目線の定まらない歩き方をしているのは、日本人の観光客です。高いものは着ている。しかし、どこか着こなしがだらしがない。彼らは固まるから目立つという事が大きいのでしょうか。あの日本人の集団での旅行はもう止めた方が良く、とつくづく思う。

マンハッタンで急増したのは、明らかに「背広族」です。驚いたのは、ニューヨークのビジネスマンの背広の色はほぼ一色になっている。それはストライドの入った「基調黒」というものです。ホテルのロビーは、そうしたプロパーな連中の大集合場所となっている。もちろん、ワイシャツは依然としてひどくカラフルです。しかし、背広の色は見事に黒に統一されてきている。日本のように紫だったり、黄色だったり、緑だったりはない。私の感じで言えば、70年代のニューヨークの方が大勢の人が着ているものはカラフルだったように思う。

### 《 network= getting more important 》

それともう一つのアメリカに関して持った印象は、インターネットの使用人口が7000万人を越えるなかで、この社会において一段と「デジタル・ネットワーク」が政治的な

重みを増してきたことです。

クリントンのセックス疑惑を審議している下院が、スター検察官の特別報告書を「最も敏速、もっとも公平」としてまずインターネットで公表したことは、この「ネットワーク」に新たな意味を与えたと言えます。

「landmark event for cyberspace, turning the spotlight o the Internet's growing political importance.」

「Welcom to chaos.com」

今回の件に関しての、前者がニューヨーク・タイムズの、後者がシカゴ・トリビューンのそれぞれの記事の書き出しです。そして、どちらも当たっている。

ニューヨーク・タイムズが「landmark event for cyberspace」と書いているのは、この報告書のインターネット経由での公表が持つ歴史的な意義を強調している。対して、シカゴ・トリビューンの「welcom to chaos.com」は、この報告書が世界中で誰でもが見れることに伴うこれからの「混乱」を予測したもの。

「あらゆる情報が瞬時に公表される時代」に突入したというのが第一印象でしょうか。これは、やはり「landmark」というにふさわしい。CNN など多くのメディアのサイトには、スター検察官の報告書がアップされる前からアクセスが殺到したという。世界中の人々がこの報告書を得るために関連サイトに殺到したと言うことです。しかしそれはまた、「chaos」の入り口に自分たちがいるのではないか、という懸念につながっているわけです。

メディアを通して得ていた情報と、インターネットで生で得られる情報には大きな違いがあると思う。今までの情報は、誰かの目を通して報じられた。つまり、善し悪しは別にして濾過されていた。大体が報道の世界に長くいた人間とか、有識者とかに。しかし、インターネットになると生でその情報が子供などを含むすべての人に平等に届く。これは一種の革命と言っても良い。そしてこの革命は、いくつもの蛇行を繰り返しながらも、確実に情報の流れをよりストレートなものにして行くでしょう。

### 《 have a nice week 》

出張中でのこのニュースを書く予定は無かったのですが、マーケットも動いているしニューヨークから作成しました。ニューヨークにいるからといって作業環境が大きく変化している訳ではない。ラップトップを一つ持ってきましたから、文章の作成、電子メール送信、PDF の作成、HTML 文書のアップなどすべてのことが東京にいるのと同じように出来る。ニューヨークのホテルのネットワーク環境は抜群です。もっとも、最近では日本のホテルもネットワーク環境はかなり良くなってきましたが。

今回出張して持ったアメリカ人に関する印象を一つ。これは色々意見があるのですが、私が見る限り彼等はどう見ても「食べ過ぎ」ている。数日観察していて強くその印象を持ちました。胸板が厚いのは体型の問題ですから分かる。しかし、その胸板の厚さがそのまま、そしてしばしば増幅して腹に来ている。日本では信じられないような腹の膨らみをした人が実にたくさんいるのです。だから飛行機でも劇場でも、席に座らなければならないときは神に祈るのです。「お願いですから、痩せた人を下さい....」と。太った人がたくさんいるというのは他人事ではない。アメリカの国内線の席は狭いですから。

体質もあるかもしれない。しかし、あれは明らかに食べる量が関係している。最初にアメリカに来たときもそうでしたが、今回シカゴで食事したときには驚愕した。同僚の一人がマグナムという比較的有名なリーブの店でカラマリの揚げ物を頼んだのです。オープナーで。しかし、来たものを見て目が飛び出した。とても一人の人間のアペタイザーだとは思えない。そしてリーブを頼んでまた驚愕した。重さを言うので、つい真ん中を言ってしまった。来たものを見て絶句した。来た瞬間から、「もうこれはドギーバッグだ」と。シカゴ在住者にかかなりの部分を持っていったら。

アメリカ人でも、日本に来るアメリカ人は比較的痩せた人が多い。しかし、これからのアメリカにとってはいかに食べないか、いかに体重を落とすかが大きな課題になるのではないかと思います。

<http://209.143.130.89/>